

---

# 魔法少女まどか マギカ ~ 幻想殺しと魔法少女

作戦参謀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ〜幻想殺しと魔法少女

### 【Nコード】

N0613X

### 【作者名】

作戦参謀

### 【あらすじ】

それが異能の力であれば、神の奇跡だって打ち消してしまう右手を持つ少年 上条当麻。彼は一週間前に御坂美琴や妹達を助ける為、学園都市の頂点に君臨する一方通行と戦い勝利した。しかし、その事が原因で彼は学園都市の外へ行くことになってしまい、彼とインデックスは行き先である見滝原へ向かった。この知らない街で上条達に待ち受けていたモノとは……？ 科学と魔法少女が交差する時、物語は始まる！ この物語は原作4巻で行き先が見滝原で当麻が父親と会わず、御使墮しも起こらず見滝原でまどか達と会っ

た場合のもしもの物語です。

## プロローグ 学園都市の外（前書き）

どうも、作戦参謀と言つたものです！

二次創作は初めてです。作者ド素人故散々な所もあるとは思いますが、頑張っていきますのでよろしくお願いします！

## プロローグ 学園都市の外

8月28日、天気は晴れ。

黒髪のツンツン頭な高校生、かみじょつてつしま上条当麻と銀髪の暴飲暴食シスター、インデックスはどういうわけか学園都市の外に来ていた。

近年になってから都市化が進んだここ みたきはら見滝原には、とても日本の風景とは思えない西洋チックな町並みが広がっており、イギリス出身のインデックスは目を輝かせていた。

「見て見てとうまー！ 日本にもこんなところがあるんだねー！」

「なんで俺ヨーロッパにいるんだっけ？ あ、そっか……ここは『外』だったな」

通常、学園都市の外に学生が出るのは難しい。何故なら、機密保持と各種作業員による生徒の拉致を未然に防ぐべく、外に出る為には許可書だの血液採取だの、さらには保証人まで用意しなくてはならないという面倒臭い手続きがある……のだが。

上条の場合は一週間前に超能力者レベル5の第1位、一方通行アクセラレータを倒している。

この噂は爆発的に学園都市内に広がり、じゃあ上条の地位が向上したか……と、言えばそれは大嘘になってしまう。上条は無能力者レベル0だ。その無能力者を倒してしまえば、俺が学園都市最強だと考えた腕自慢の不良達が、一斉に上条狩りを始めたのである。

この騒ぎに頭を抱えた学園都市上層部は、上条を一時外へ退避させる事を決定。こうして上条当麻とついでにインデックスは、学園都市の外に出る事になったのだが……。

(しかし、西洋風の街つてのが悪意を感じられるんだよねー)

上条にとって西洋とはあまりいい思い出がない。そもそも、上条は一ヶ月ほど前以前の記憶は失っているのだが、記憶を失った後も三沢塾やヘビースモーカー不良神父の事もあり、西洋に魔術師と勝手に脳内変換されるようになってしまった。

見滝原（こ）に来て嫌な予感がすると思ったのは、まさに今までの騒動のせいである。

と、ここで上条はインデックスの顔色を伺った。なにやら嬉しそうだが、上条にはインデックスが嬉しそうにしている理由がすぐにはわかった。

このシスターは単純大食い娘だ。そして今、上条の鼻にもいい匂いを感じている。

大体の理由がわかった上条はため息をつき、

「食べるのはお世話になる家についてからな」

「そ、そんなことわかってるんだよ！」

「へいへい、精々鹿目（かなめ）さんに迷惑掛ねえようにな」

上条達がお世話になる先は鹿目さんという家らしい。なんでも、上条の父親とこのお父さんが知り合いらしく、しかし上条の父親は海外出張で忙しいとの事で、そこで上条の父親はしばらく上条がお世話になる家を用意した。そこが鹿目家というわけである。

（父さん……か。結局会えなかったけどどんな人なんだろう……？）

くどいようだが、上条は一ヶ月上前の記憶を完全に失っている。それはつまり、自分を生んだ親の顔や自分の生まれ故郷、自分が学園都市に入った経緯すら覚えていないというわけだ。

親や故郷の事を覚えていないとは、なんとも複雑な気分させるものだが……。

（まっ、考えたって仕方ねえか。とにかく、鹿目さんに迷惑かけねえようにしねえとな）

そんな事よりも、もっと重要な事が目前に迫っていた。上条は、いかにインデックスのお腹を満たして鹿目家の負担を最小限に抑えるか、真剣に悩んでいた。上条家の財政はただでさえインデックスの食費に消えているのに、今度お世話になる鹿目家は育ちざかりの子供もいるらしい。

学費や食費も半端じゃないだろう。そこにまた、腹ペコ上条ともっと腹ペコで大食いなインデックスが加わるのだ。きっと、鹿目家は1日もしないうちに財政難になるだろう。

長い事お世話になる予定はないが、自分達が去った後の鹿目家が心配だ。

なので上条はインデックスに我慢を覚えさせるか、それとも自分の有り金を叩いて何かを食べさせてあげるべきか、真剣に悩んでいたのだ。

前者は多分無理だ。インデックスは我慢ができない子である。なら後者、それは上条家の財政がさらに悪化するという意味だが、鹿目家を財政難にさせたくはなかった。

仕方ない。辛い日々が続くかもしれないが、人様に迷惑を掛けない為だと思い、上条は笑いながら振り向いてインデックスに声をかけ、

「よし、インデックス。鹿目さんの家に行く前に何か食って」

言いかけた言葉が止まる。

さっきまで隣にいたハズのインデックスがいないのだ。

魔術師……なわけがない、そんな気配は全くなかった。それにインデックスが姿を消した理由として最もそれっぽいものがある。食べ物。

そう、さつきから香る食べ物のいい匂い。インデックスは多分、このいい匂いに釣られて上条放置で何処かに姿を消したのであろう。

「早速インデックスさん迷子!? くそっ! 何か地元の学生がいっぱい歩いていて食欲シスター発見できねえし。ちくしょう不幸だ、やっぱりお前は脳に食い物しかねえじゃないか!」

道行く近所の見滝原中学校の生徒達が、上条のことを不審者を見る目で見っていたが上条はそんな事などお構いなし。思う存分頭を掻きながら叫びまくっていた。

「おーいインデックス!」

いつまでも騒いでいるわけにはいかないと、とりあえが上条はインデックスを探すべく見滝原を走り始めた。大通から小道に恐る恐る入り、インデックスがいまいか目を凝らす。しかしインデックスの気配はおるか、この小道には人の気配すら感じられなかった。

それでも上条はインデックスを見つけ出すべく、小道を突き進んだ……が、

「うわ、このままだと俺が迷子になりそうだっ」

冷や汗が出てきた。知らない街で上条が迷い始めたのだ。

と、ここで馬鹿な上条も一つ　いい事を思いついたようだ。

(そうだ、携帯だ!)

慌てた様子でポケットから携帯電話を取り出し、それをガバツと開く……が、悲惨な事に携帯電話に電源が入っておらず、ボタンを押しても電源が入らない。

電池切れ。

そういえば、と上条は思い出す。三日前から充電した記憶がない。あんまりメールはしないタイプの上条だが、昨日は悪友の青髪ピアスつちみがどもとはるや土御門元春と、スク水少女について熱い議論を交わしていた気がした。

そのせいで4日は持つはずだった充電が、一気になくなってしまったのだらう。

「……不幸だっ」

上条はいつもの口癖を呟き、深いため息をついた。

……瞬間。

世界が世界が一変した。

単なる路地裏だったはずのそこは、不気味な色で彩られた奇妙な空間へ変貌した。

（なんだ……？）

不思議に思った上条はキョロキョロと、顔を左右へ振りまわす。

ステイルの人払いのルーン……とも違うようだ。ステイルのソレとは違い、世界そのものが変わってしまったような摩訶不思議な雰  
囲気。

思わず、上条の拳に力が入る。

「まさか……魔術か？」

アクセラレータ 一方通行の仕業なわけがない。御坂美琴みさかみことと言う超能力者レベル5の第3位

だってこんな事はできない。

あの常盤台のお嬢様（？）は精々、自身の能力である超電磁砲レールガンでコインをふっ飛ばしたりビリビリと電撃を放ってくるだけだ。

そもそもソレは超能力のものとは何かが違う。やはり魔術、それもステイルのルーン魔術とはまるで別物な感じである。どう考えてもお友達になりましようと言う空気ではない。

そこで、上条は一つの大切な事を思い出す。

「ッ！ インデックス！」

不気味な空間を走り回り、上条はインデックスの名を叫んだ。しかし、白い修道服を着た少女の姿はおるか、インデックスの独特の声すら全く聞こえない。

ここにはインデックスはいないのか。

それとも、インデックスは既に何者かに襲われてしまったのか。インデックスが消えた原因を考えていた。その時。

「、」

ケタケタケタと、上条の周りで不思議な生命体のようなものが、聞いてるだけで背筋が凍る不気味な笑い声をあげていた。

さらに上条の頭上では誰にも持たれていないハサミが、勝手に動いて重そうな鎖をチヨキチヨキと切刻んでいた。細かく切断された鎖の中の数本が、勢いよく上条目がけて降ってきた。

当たれば、人間などペシャンコにしてしまう鎖の大群。

「くそっ！」

上条は咄嗟に右手を頭上へ突き出す。逃げても無駄だと思ったんだろう。そのせいか上条は逃げずに右手を頭上へ突き出したのだ。

普通に考えれば自殺行為であった。しかし……降り注ぐ鎖の中の本が上条の右手に触れた瞬間。

ガラスが砕けるような音が響き、鎖は粉々に砕け散った。  
イマジンプレイカー  
幻想殺し。

それが異能の力なら神の奇跡だって打ち消す、上条の右手に宿る能力だ。特別喧嘩が強くなるわけでも女の子にモテるわけでも、成績がよくなるわけでも幸せになるわけでもない。むしろ神の奇跡を打ち消すので、不幸を呼ぶ右手であるのだが、それでも異能の力を打ち消せる。

つまり、魔術師や超能力者と対等に渡り合える事が出来るのだ。

「右手で打ち消せた……やっぱり魔術か！」

驚きの直後、確信した。これは魔術だと。

上条はキョロキョロと、周囲を見回した。周囲には異形の生命体に、再び上条を押しつぶそうと宙を舞う鎖の数々。鎖を相手にしてはキリがないだろう。なら、と思った上条は、

「おオアああつ！」

ダツ！ と駆け出した上条は拳を握り締め、一体の異形の生命体に狙いを定める。

得に反撃しようとする素振りは見せない。チャンスと感じた上条は、その主砲である右拳を一気に異形の生命体へと叩きこんだ。

バキン！ と生命体はバラバラと崩れて姿を消した。だがその後、数百と戯れている生命体が一斉に上条に襲いかかってきた。後方へ一歩ずつ跳躍しつつ、時々右腕を振るい、拳を当てて生命体を打ち消していくが、上条一人で相手をするにはあまりにも数が多すぎた。

「く、そ キリがねえっ！」

そんな上条を襲うかのように、頭上から鎖が何本も落下してきた。それらは上条には直撃しなかったものの、上条のすぐ前に落下した鎖が埃を舞い上げた。

「ぐっ！」

そのせいで視界が遮られる。

咄嗟に上条は腕をクロスさせ、右目だけは閉じず最低限の視界を確保しながら、自分の身を守ってみせた。上条自身にダメージはなかったが、舞い上がった埃のせいで視界は悪い。霧の日に峠道を走るよりも視界が悪く思えた。それでも、時間が経つにつれて埃は何処かへ飛んでいく。

ようやく視界が回復し、上条は咳き込みながら両目を開けた……が、

「……っ!？」

上条の眼前に異形の生命体達が迫って来る。四方で戯れる生命体に完全に囲まれ、こんな状況では頼りの幻想殺イマジンプレイカーしても対処は難しい。幻想殺イマジンプレイカーはあくまで右手のみの能力だ。

数の前には優れた能力も無力なのである。

どうしようもないと判断した上条は、咄嗟に身を屈めて防御の態勢に入った。

……次の瞬間であった。

「な、なんだ ?」

包み込むような何かが上条の周囲で巻き起こり、彼を包囲してい

た異形の生命体や彼を押し潰そうとしていた鎖が、一瞬にして一斉に数十メートルほど吹き飛んだ。

何事か。驚いた表情になった上条は周囲を見回す。

吹っ飛ばされた生命体以外には誰もいない、いるハズがない。

「危なかったわね」

「っ！」

それなのに背後から 全てを包み込むような優しげな声が聞こえてきた。

身体ごと振り返ると、奇妙な背景から伸びている不気味な階段から、やや大人びてはいながら上条よりは少し幼く見える、どこかの学校の制服を着た少女が現れた。縦ロールの金髪に、インデックスとは対症的な胸を持ち、左手に不思議な物体を持つ少女は微笑みながら上条に近づく。

優しくも怪しげな雰囲気を放つ少女を眼前に、上条は自然と後退りをする。

その態度は初対面の人に対し 失礼極まりないものだ。

「でももう大丈夫」

にも関わらず 金髪の少女は安心感ある言葉を掛けてきた。

見た所、悪いヤツには見えない。そう思った上条は勇気を振り絞り、

「お、オイお前、ここは危な」

「さて、ちょっと一仕事片付けちゃおうかしら」

少女は上条の言葉など聞かず、怪しげな動きを見せる。すると、次第に制服姿だった少女の衣服が変化してゆく。インデックスが普段見ている、マジカルバード超機動少女カナミンのように。

少女は余裕そうな笑みを浮かべたまま、一気に何十メートルも飛び上がる。手を一振りすれば無数の単発式マスカット銃が、少女の周りに次々と現れる。

ソレは上条が知っている、ステイル・マグヌスのルーン魔術とは明らかに違う。どちらかと言えばアウレオルス・イザードのアルス・マ黄金練成グネにそっくりであった。

上条が啞然とする中、無数のマスカット銃が一斉に火を噴いた。無数の弾幕が異形の生命体へと降り注ぎ、大地を揺るがすような大爆発を起こす。

赤い炎に黒い煙が立ち込める中、金髪の少女は優雅に着地してみた。それと同時に奇妙な世界は崩壊し、上条が気付いた時には元の路地裏に戻っていた。

「世界が……戻った？」

「魔女は逃げたみたいね」

「お、お前は一体？」

「そうね、自己紹介がまだだったわ　ともえ巴マミよ」

イマジンプレイカー幻想殺しを持つ少年　上条当麻。

不思議な魔術のようなものを扱う少女　巴マミ。

この2人が交差した今　物語は動き始めた。

## プロローグ 学園都市の外（後書き）

どうも、作者です！

正直その日のノリと思いつきの勢いのみで書いたので、この先のストーリーはあまり考えていません（オイ！）

それでも力尽きないよう、週一ペースで頑張っていきますのでよろしく願います！

第1話 記憶にない知り合い（前書き）

ようやく第1話です！  
ただし駄文注意です！

## 第1話 記憶にない知り合い

バミミ。

その金髪縦ロールの少女は、上条が見滝原で最初に知り合った人物である。とりあえず危険な所を助けてくれた彼女にお礼をすると、今度はバミミが上条に話をかけた。

それも、少しばかり不満げな表情を浮かべながら。

「それにしても貴方、どうしてあの場所にいたのかしら？」

「ああ、ちょっと連れと逸れちゃったから、その子を探していたんだ」

「そ、そう……」

あまりにも普通すぎる回答が、かえってバミミにとっては不思議に思えた。それは彼女が上条の事を普通の人間ではない、何らかの組織に雇われた特殊な人種とでも考えたからだ。バミミがそう考えた理由は言うまでもなく、上条の右手 イマジンブレイカー 幻想殺しの力である。

(おかしいわね、魔女やその使い魔は魔法少女にしか倒せないはず……それなのにつ)

バミミは再び上条の右手を凝視する。一見なんてことのない右腕だ。細くてそこそこ筋肉はあるかもしれないが、とても鍛えているとは思えない、ごく普通の高校生の腕である。だが、バミミは上条と使い魔の戦いを最初から見ていたので知っている。

上条の右手は、使い魔やその攻撃を打ち消していた。それだけでも十分、バミミにとって上条はイレギュラーな存在に思

えた。

さつきから右腕を凝視するマミの視線に、どうやら上条は気付いたようで、

「ん、俺の手がどうかしたか？」

「いや、なんでもないわ。それより最近はどういう事も多いらしいから気を付けて」

「ああ、わかった。お前も気を付けるよ」

「ええ、またいつか会いましょう」

そう言い残し、マミは髪を靡かせながら路地裏の奥へ消えていった。マミの後ろ姿が見えなくなるまで彼は同じ方向を見続けた。マミはマミで上条の事を不思議がっていたが、上条もまたマミの事を不思議な目で見ている。

マミが何らかの力で創り出した無数のマスケット銃。

結局彼はマミの事について聞きはしなかったものの、上条はマミの事を、どこかの魔術師だと思いこんでいた。彼にはアレが魔術にしか見えなかった。アウレオルスの黄金練成アルス・マクナに似ているような気がしてならなかった。

何より一番気になるのは、仮に魔術師だとして 巴マミはインデックスの敵か味方か。

それこそが一番気になる所であり、最も重要な事である。

(……って、情報が少なすぎて考えてもわからねえな)

しかし、全てを決めつけるにはあまりにも情報が少な過ぎた。

結局マミの正体がわからぬまま、上条はインデックス探しに戻る

事にした。あの食欲シスターを見つけない限り、これからお世話になる家に行く事が出来ないのだ。

インデックスは意外にもわかりやすい場所にいた。

最初こそ彼女を探すのは不可能だと思っていたが、大通りに出てみると、最初に目に入ったカフェの野外席に、見覚えのある修道服に身を包んだ少女の姿が見える。上条はよく目を凝らして怪しげな少女を見てみると……その子は探し求めていたインデックスだった。

「あ、とうまだ！」

見知らぬ人と楽しげに会話をしているインデックス。その姿を見て、散々彼女を探した挙句不幸な出来事に巻き込まれた上条は、一気に気が抜けて地面に転ぶ。

突然の物音に、インデックスともう一人の赤髪の少女が反応した。

「ごらあああああああ！ キサマはこんな所でなにやってんだ！ 散々探しまくった挙句面倒くさい事に巻き込まれた俺の苦労はなんだっただんた！？」

「私はこの人にお菓子を食べさせてもらってたんだよ！」

上条はインデックスの言う、この人をもう一度よく見てみる。

赤い髪のポニーテールの少女だ。口にケーキか何かを銜えており、八重歯らしきものがキーキにしっかりと刺さっている。

どうやら、インデックスはこの人に菓子を奢ってくれたらしい。

必死に彼女を探し、途中で不幸な出来事に巻き込まれていた間に

……。

「はあ……つまりアレか。てめえの脳には食い物しかなくて、上条さんという人物の検索結果は0ってわけですか」

「とうま」

「あ？」

「お菓子、食べる？」

上条の言葉をスルーし、太陽も驚くような笑顔を浮かべるインデックスを見て、

「……不幸だ」

上条は今までの不幸を全て吐きだすように、お決まりの一言を言った……が、上条が不幸に浸っていたまさにその時。バン！と、勢いよくテーブルが叩かれた。衝撃でテーブルに乗っていたコーヒ―がコップから零れる。

恐る恐る、上条は左側へ首を向けると……。

食べ物を銜えた奢り少女が、不機嫌そうに立ち上がった。そして、加えていたケーキをお皿に戻して、キッと上条の事を睨み付け、

「アンタ！」

「は、はい！」

上条は何故か恐怖を覚えた。インデックスにお菓子を奢った少女

は、どういっわけか鬼のような形相を浮かべ、上条の事を敵のように睨んでいたのだ。

思わず上条の背筋がピンと伸びる。次第に冷や汗が吹きだしてきた。

「アンタ……食い物を粗末に扱っなよ」

「……はい？」

「だから、折角食い物をくれるって言うてくれたのに、それを不幸だっって言っな！ 世の中には食い物が食えないヤツだっっているんだ」

「す、スミマセンデシタア！」

なんだかよくわからないが、とりあえず謝っておこう。

上条はそう思い、実際に頭を下げた。

ここで謝っておかないと、インデックス並に食意地の張った女の子に、右腕が切れて無くなるまでポコポコにされそうな予感がしたからだ。

「わかればいいんだ。ほれ、これアンタも食えよ」

さっきまで白熱していた少女は、一気に大人しくなった上にケーキを差し出してきた。

なんだっただ？ と上条は思いながらも、そのケーキを受け取る。受け取ったケーキに彼女の歯型がついているが、上条はそんなものを気にする人間ではなかった。同時に、ケーキを差し出した少女も間接キスなど気にしない人のようである。

最も、お互い意識していない事も理由の一つかもしれないが……。

「あ、これつめえな」

「とうま……とうまは私のお菓子は食べないんだ」

「えっ？ い、インデックスさん？」

「つまりとうまは私のお菓子は嫌なんだね」

「あの〜インデックスさん？ これはその、色々ありましてですね……っつて」

セリフを切った瞬間 猛獣インデックスが思いつきり上条の頭に噛みついた。

カプリ、と。

インデックスの歯は上条の頭皮に刺さっていた。

「びゃ、びゃあああ！ ちょっと待てインデックス！ こっちはさっき色々あつて超お疲れモードなんだよ！ だから噛み付くのは勘弁してくださいお願いします！」

「色々？ 色々って何！？ まさかとうまはまた私に内緒で魔術師と戦ってきたの！？」

「違うの！ 違います違うんです三段活用！」

「一体何様なのかなとうまは！ 見え見えの嘘をついても無駄なんだよ！ とうまの行動パターンは単純だから必死に否定する時は怪しいかも！」

「いててて！ くっそ〜ああもう！ 不幸です不幸すぎますー！」

シリアスな場面でも出なかつた大声を、上条はギャグのような場面で出していた。こんな光景は上条とインデックスにとっては日常茶飯事。

しかし、そんな事を知っているハズもない赤髪の少女は、

「おもしれーヤツらだなあ」

なんだか羨ましそうな表情を浮かべ、一言そう呟いていた。

ちなみに、上条の頭からインデックスが離れたのは、この5分後の事である。本日の噛み付きは今までで2番目くらいの長さであった。

顔や頭には歯型だらけ、可哀想な上条である。

上条とインデックスは赤髪の少女と別れ、今度こそ目的地の鹿目家を目指し、ゆっくりと見滝原の風景を楽しみながら歩いていた。もう一度眺めてみると、ここは本当に日本ではなく、ヨーロッパのどこかの国の都市のように見える。

不思議と心が落ち着く風景だ。

やがて、2人は閑静な住宅街に足を踏み入れ、その中の一軒家の前で足を止める。

現代的な造りの立派な家であった。

とある番組で匠が設計、建築した雰囲気放了家。その表札には『鹿目』と、しっかりとしながらもやや可愛らしい字体で刻まれている。

「ここが鹿目さんの家かあ」

「わあ、とうまの家より広そうなんだよ!」

「てめえにだけは言われたくねえけど、でも本当そうだろうから別にどうでもいいや」

しかしこれだけ大きいと、インターホーンを押すのに緊張するものだ。それを押そうとしていた上条の右腕も、不思議とビクビク震えていた。

「とうま、度胸が足りないんだよ」

「うつせ黙れ！」

ツツコミを入れたインデックスに、上条はイライラしながら怒鳴り返した。その勢いで一気にインターホーンへ指を押しつけ、ピンポンと言う機械的な音を鳴らす。

外部と内部が通じ、女性の『は〜い』と言う返事が聞こえる。

「すみません、上条ですけど……」

『ああ当麻君ね。待ってて、今あけるからさあ』

この馴れ馴れしさ……もしや知り合いか？ と、上条は思う。記憶喪失の上条はクラスメイトの名前さえ一部を除いて覚えていない。そんな上条が、学園都市の外にいる知り合いの顔や名前なんて覚えているはずがない。やっぱり、鹿目さんは知り合いのようである。と、その時不意にドアが開く。

玄関にはショートヘアの美しい女性と小さな少年。さらに眼鏡の男に、上条よりも年下であろう小柄な少女が立ち並んでいた。

「やあ、いらっしやい。久しぶりだね当麻君」

眼鏡の男　おそらく上条の父親の知り合いであろう男が、いかにも上条の事を知っていますという感じで挨拶をする。その隣で小さな男の子もニコニコと笑っており、さっきの声の主であろう女も笑みを浮かべていた。

その影で一人、学校から帰ったばかりなのか、まだ制服を着ていた少女はチラチラと上条の事を何度も見ている。そんな4人の姿を見て、とりあえず上条は推測する。

（上条さんは知っている。こういう反応をする人達は大体知り合いだってな）

普通に考えればそうなのだが、上条の普通の感覚は地味に狂い始めている。なんせ彼の主な知り合いは隣にいる不思議シスターさんや、ヘビースモーカーの不良神父。そして、常盤台中学に通うビリり中学生など、普通じゃない人達ばかりだからだ。

そのせいで、上条はそこまで深読みをしまったのである。とりあえず上条は笑顔を浮かべて、

「どうも、お久しぶりです」

「こんにちはなんだよ！」

インデックス……その挨拶はねーだろ、と思いつつ、上条は笑顔を崩さず、ずっと4人に対してニコニコしている。しかし、若干顔が引きつっているのはここだけの話だ。

「他人行儀だなあ、昔みたいに本当の親だと思ってもいいんだよ」

「そつだぞ当麻君。ほら、まどかも……ね？」

「ま、ママっ！」

意味あり気に言う女 鹿目詢子かなめじゅんこに対し、その娘である鹿目まどかなめかは恥ずかしそうに叫んでいたが、例によって上条はそれほど気にしていなかった。

むしろ、まどかの反応が気になっているのは、上条の隣にいる穀潰し。

「とうま。とうまの影響はこんな所にまで及んでるんだね」

「ちょ、ちょっとインデックスさん？ 何故貴女は怒ってるんですか？」

「やっぱりとうまはとうまなんだよ！」

「意味がわからねえ！ お前は何で怒ってんだよ！？」

「うぎぎぎ、と〜と〜ま〜っ！」

インデックスがキラリと輝く歯を見せた瞬間。

それがカプリ、と上条の頭に突き刺さる。本日二度目の噛みつき攻撃である

いつもの事とは言え、毎度毎度噛みつかれるのはやっぱりゴメンだ。

「ぎゃあああああっ！ 理不尽だ理不尽です不幸だアああああっ！」

インデックスを振り払おうと頭を振りまくる上条を、まどかの父親である鹿目知久かなめともひさは突然の事に驚いているようで、詢子はニヤニヤ。

まどかの弟である鹿目タツヤは3歳児なので上条が噛まれている理由など、知っているハズがない。

だが、2人やりとりが面白いので、きゃっきゃと笑い声を上げていた。

そしてまどかは……、

（あの子……誰なんだろう？ も、もしかして彼女とかじゃないよね……？）

なにやら一人、上条とインデックスの事で不安に思っている様子であった。

どうやら上条は タツヤ以外の3人とは面識があるようだ。

## 第2話 上条当麻

「不幸だ……」

またしても、お決まりの文句を呟く彼 上条当麻。

頭や顔どころか、服にまで歯型がしつかりと残っている。それは全部、上条家の財政を悪化させている穀潰し インデックスのせいである。

インデックスは怒ると噛みつく癖があるらしい。全く迷惑な癖である。そして、上条はほぼ毎日その癖の犠牲になっているのだ。慣れているとは言え、やっぱり髪付き攻撃は痛い。それ以上に同居人に噛まれる事がショックなことかもしれない。

「そろそろ寝る時間かぁ……」

時計を見て確認する。

今日はマトモな晩御飯を食べて幸せであった。これまで、上条家の食卓と言えば安いレトルト食品のオンパレードであったが、今日はごく普通の生鮮食品を使ったマトモな料理。インデックスも「とうまの作ったご飯より500倍はおいしいかも!」と大絶賛のご飯であった。

だが、あれだけ大量にあったご飯の大半は インデックスのお腹の中に消えたのだ。

はぁ、と上条はため息をつく。その時、コンコンと言う物音が響いた。

「ん、入っていいぞ」

ドアをノックされたようである。インデックスか……と思ったが、

あの不思議シスターさんが礼儀正しく部屋に入ってくるわけがない。いきなり豪快に扉を開け、上条の名前を叫びながら突撃してくるだろう。

なら、詢子あたりが妥当なものかと上条は思った。しかし、

「当麻お兄ちゃん、お邪魔するね」

「えっ？ か、鹿目？」

部屋に入ってきた意外な人物を視界に捉え、上条は思わず声を上げる。

「当麻お兄ちゃん、それじゃまるで初対面の人だよ？ 今まで通りまどかでいいんだよ？」

「えっ、ああ悪かった。久々だから俺も緊張してたんだ」

「ティヒヒ、当麻お兄ちゃんも相変わらずだね」

上条は肝心な事を忘れていた。鹿目家の父と母が上条と面識があると言うことは、当然娘のまどかとも面識があるというわけだ。つまり、記憶にない昔のこと。上条とまどかは何処かで会っているということになる。それが何時、何処で、そこで何があったのか。細かい事はおろか、まどかがどういう子なのかすら彼は覚えていないのだが。

(とにかく、知り合いだってんなら演技しねえとな)

記憶喪失であることは決してバレてはいけない。記憶のない上条

は、覚えていない以前の上条を演技する必要があるのだ。

あの子の悲しそうな表情を見て、彼はそう決意したのである。

「ほらこれ、去年のお正月の写真だよ」

まどかが上条の隣に座ると、突然携帯電話を取り出し、画面を上条に見せつける。

温かく、柔らかくて甘い匂いのするまどかの感触も気になるが、それ以上に上条の興味を引いたのは携帯に映っていた写真である。写真はどこかの神社の鳥居をバックに、ジャージ姿の上条にしがみ付く桃色の髪の少女が移り込んでいた。

写真が映っている携帯の画面を、上条は本の僅かに頬を赤く染め、まどかのほうをチラチラ見ながら写真を見る。やっぱり……写真に写っているのは隣にいる子　まどか本人だ。

「ああ、そういえば去年行ったよなあ」

本当は行った記憶なんてないのだが、写真が何よりの証拠だ。それに、自分が記憶喪失である事をバラせばまどかは悲しむか、あるいはインデックスのようにお怒りになるか。

どちらにしても、好ましい展開とは言えない。

それに上条はようやく、自分とまどかの関係が理解できたようである。

(そっか……俺とコイツは幼馴染みたいなモンだったのか)

そう、まどかは上条の妹分のような幼馴染。義妹とまではいかなくとも、彼の悪友である土御門元春が喜びそうなポジションにいる子　それが鹿目まどかという少女である。

「今年もまた一緒に行けるかな？」

「そうだなあ……今もこうして再開出来たんだし、今年も行けるんじゃないか？」

「……うん！ 私、楽しみにしてるね！」

それから、上条とまどかの会話は続いた。何気ない日常会話である。ただし上条は学園都市の人間で、まどかは学園都市の外の人間である。その違いは非常に大きく、故にまどかは学園都市の話に興味を示し、上条も学園都市の外の話に興味を示していた。

さらに、2人には高校生と中学生という違いもある。その違いがあるだけで、無限に話題が湧いてきて2人の会話は留まるところを知らなかった。

そうしているうちに、上条にとって一日目の夜は更けていく、

「あつ、いけない！ そろそろ寝ないと明日学校に遅刻しちゃうよ」  
「っ」

「学校？ そつかあ、外の世界はもう夏休みが終わってるだったな」

「当麻お兄ちゃんはまだ夏休みなの？」

「今月の31日までが夏休みだな」

「いいなあ〜夏休みが長いつて、羨ましいー！」

「そうか？ ぶつちやけ補習受けてた記憶しかねえけどな」

「当麻お兄ちゃん、もしかして勉強苦手なの？」

「ぐはっ！　今の上条さんは心にマリアナ海溝より深い傷を負いましたよっ！？」

「はわわっ！　ご、ごめんね！」

無能力者<sup>レベル</sup>と言っても様々な人種が存在するが、上条は学園都市の中でもレベルの低い高校に通っており、その高校でさえ赤点を取る程度の学力しかない。つまり、上条は世間一般で言うおバカな高校生なのである。

最も、能力が全てという空気が充満している学園都市において、たとえ勉強が出来たとしても能力が使えなかつたら、地位が向上することなんてありえないのだが。

「別に事実だからもういいよ。それよりまどか、そろそろ寝ないとまずいんじゃないか？」

「う、うん！　そうなんだけど……っ」

「……？　どうした、顔赤いぞ？」

「きゃうっ！？　な、なんでもないよ！　おやすみ当麻お兄ちゃん  
「！」

「あ、ああ……っ」

バタバタと、まどかは逃げるように上条の部屋（仮）から去っていった。なんだか恥ずかしさのあまりに逃げ出す感じだったが、そんなものが上条に伝わっているわけもなく、

「……なんだ、アイツ？」

ただ、一人でまどかの様子がおかしかった理由を悩んでいた。最も、まどかの様子がおかしい理由は、誰が見たって悩むほどの事でもない。それでも上条当麻と言う男にはわからなかったのである。

まどかの胸に隠れている　ある莫大な感情の正体が。

S G B

上条当麻や鹿目まどかが寝ようとしていたその頃、見滝原のとある建物の屋上にて三人の人物が秘密裏に話し合いを行っていた。

「へえ、それで必要悪ネセサリウスの教会の協力を仰ぎたいってわけかにゃー？」

語尾ににゃーという、大変ふざけた口調で話すこの男。

短い金髪に青いサングラスをかけた、アロハにハーフパンツの少年は、妹と大きく記されたうちわを仰ぎながら喋っていた。

つちみかぢもともはる  
土御門元春。

普段は上条当麻や青髪ピアスといった、悪友達との会話に花を咲かせる彼も、本来の姿は裏の社会で暗躍する必要悪ネセサリウスの教会の一員である。

それも大変怪しいものだが……。

「ええ、2人はその筋のプロだと聞いてるわ」

「確かに、我々は対魔術師の技術に特化した人材を数多く抱えてい

ます」

土御門の近くには2人が立っている。

一人は少女だ。長い黒髪を掻き分ける仕草を頻繁に見せる容姿端麗な少女は、ネセザリウス「どうやら必要悪の教会の噂を聞いて相談しに来たらしい。」

一方、それに対して2メートルを超える日本刀を腰に下げる女。後ろで束ねた長い黒髪、しなやかな筋肉を覆う肌は白く、絞った半袖のシャツに片足だけを強引に立ち切ったジーンズとウエスタンブーツ。この露出度の高い衣服は、どうやら「左右非対称のバランスが術式を組むのに有効」という理由があるらしい。

かんざきがあり  
神裂火織。

彼女も土御門と同じ、ネセザリウス必要悪の教会の一員である。

「しかも、ねーちゃんは世界に20人といない聖人の一人ぜよ。騎士団の一部隊程度なら余裕のよっちゃんて倒せる腕前を持つてるぜい？」

「ええ、だからこそそのお願いよ。一緒にワルプルギスの夜と戦って欲しい」

長い黒髪の少女　あけみ 曉美ほむらは、土御門達にそう頼んだ。

通常、魔女やその使い魔と呼ばれる者達を倒すためには、魔法少女の魔力を込めた武器が必要なのであるが、その魔法少女に近い存在　魔術師ならどうであろうか？

種類こそ違うとは言え、魔法を使うと言う点では魔法少女も魔術師も共通している。

「その話はステイルから聞いています。ワルプルギスの夜と呼ばれる魔女はスーパースセルを起こし、周囲に甚大な被害を齎もたらすらしいで

すね」

「しかも、今回は見滝原（こい）に発生する可能性が高いらしいが、歴史を辿ればソイツはどこにでも登場するモンらしい。下手をすれば学園都市 いや、世界を混乱させる存在だぜよ」

「ということとは……あなた達っ」

ほむらは目を見開き、神裂と土御門をチラチラと交互に見る。

まさかとは思った。だけど、現実そんなに上手くいくものなのだろうか？

何があっても巻き込まず、それでもって守りたい対象がいるほむらにとつて あまりに都合が良すぎる話が、果たしてあるものなんだろうか？

今まで絶望のみを経験してきたほむらに、奇跡なんてものは信じられない。

それでも 絶望ばかりを見てきた少女を、彼らは見捨てなかった。

「ああ、俺たちこの問題を解決する為に、イギリス清教（せいぎょう）から派遣されてきた 魔術師なんだぜよ」

「それじゃあ……っ」

「はい、あなたと我々の目的は概ね一致するようです」

「それに、お前にだって守りたいもんがあるんだろ？」

「私は……っ」

守りたい。

その為にアイツと契約して魔法少女になった。

魔法少女の本質やアイツの正体を知り、あの子を魔法少女にさせずにあの子を守ろうと私は決意した。

ほむらはその強い決意を表すように、鋭い目つきで土御門達の事を見つめた。

「共にワルプルギスの夜と戦いましょう、私も協力します」

「それに今回の件には、イマジンプレイカー幻想殺しや禁書目録も関わっている。俺たちとしても無視できる軽い問題じゃないぜよ」

「……っ、恩に着るわ」

こうして、魔法少女と魔術師の利害関係が一致した。

ネセサリウスイギリス清教必要悪の教会所属の魔術師2名と、守りたいものの為に何度でも挑戦する魔法少女、暁美ほむら。

災いを齎すもたと言われるワルプルギスの夜。

そして、今回の件に関わっているとされるイマジンプレイカー幻想殺し。

今まさに 新たな戦いの火蓋が切って落とされようとしていた。

## 第2話 上条当麻（後書き）

ぶっちゃけどうでもいい話：

小説中にあつたSGBとは、本編で機会がなかったのでここでその意味を紹介！

「そのひんちきをさす  
SGB!」

当麻「なんだこの無意味な企画？」

インデックス「というか、私の出番が早速なくなつたんだよ!？」

これはとうまのせいかも!」

当麻「なんで俺!？　つか痛いす噛みつかないでください不幸だ  
あああ!」

### 第3話 鹿目家の朝

「ここは白と黒の世界。

なにもない、ただ2色が存在するのみの、果てしなく寂しく悲しい世界だ。

ただ、この空間には廊下のようなものがあつた。白と黒の2色で彩られた、空間に存在する通路を駆ける人の少女 鹿目まどか。彼女はひたすら駆ける。何かを目指すかのように 慌てた様子で走っている。

桃色の髪を靡かせながら走る彼女は、やがて行き止まりにぶつかる。白と黒の空間を貫くような廊下がある場所で終わった…… と思ったが、

(…………いや、これ…… ドア?)

広場で【EXIT】と言う緑色に輝く看板を見かける。不自然に階段が伸び、その奥は真っ暗でよく見えないが、まどかにはドアのようなものが見えるらしい。

恐る恐るまどかは階段を上り、変な構造のドアに手をかける。重い。

開けようと押したドアは予想以上に重たいものであつた。中学生のまどかでも、思いつきり力を入れないと開けられない。

それでもドアは開いた。異常に重たいドアを開け、まどかは静かに開眼する。

「ッ！」

その瞬間、恐ろしい光景が目に入り まどかはその場で固まってしまった。

まず整理すると、ここはどうかやら大きな木の上らしい。空は暗く、輝きを失った無数の金色の歯車が空を舞っていた。何よりまどかが驚いたものは、空に浮かぶ巨大な物体。それはドレスを着た巨大な歯車の化け物であった。

都市は化け物を中心に破壊され、化け物は不気味な声を上げている。

まどかは静かに前に進み、もっと化け物の姿が見やすい場所へ移動した。

「……………ッ！」

荒れ果てた街の中に、一人の少女がいた。左腕に盾のようなものを装着した、まどかとは対照的な雰囲気を持つ黒髪の少女である。

少女は何かを決意したかのように跳躍し、歯車の化け物へ飛びかかった。だが、大きく飛び上がった少女に何故か、巨大なビルが降ってきた。

ビルとビルが衝突し、ドロドロとした黒煙と、ガラスの雨が降り注ぐ。

だが、それでも少女は生きていた。

黒煙の中から颯爽と姿を現し、少女はビルから飛び降りるように降下する。そんな少女を狙う七色の太い光線のようなものが伸びてきた。何発も、何発も……しかし少女は倒れない。避けたというよりは光線をかき消しているようであった。

左腕に装着している盾が、効力を発揮しているのだろう。

「ひどい……………ッ！」

地獄のような光景を見ていたまどかが一言、素直な感想を叫んだ。

「仕方ないよ、彼女一人では荷が重すぎた」

しかし、まどかに釘を刺すような一言が何者からか放たれる。ソイツは人間ではない。声は人間のようなもので、女性に近い者だったが……白い外見のマスコットのような4足歩行動物。それが何かはわからない。どんな生き物かさえも　そもそも生き物なのかすら。

「でも、彼女も覚悟の上だろう」

そう語る白い生命体と、それを聞いているまどかの上空では今も少女が戦っている。

戦況は最悪だ。黒髪の完全に押され気味、このままでは命さえ危ないだろう。突如放たれた赤色の一撃に少女は耐えられず、飛ばされて背中を何かに強打する。

「そんな、あんまりだよ！　こんなやつてないよ！」

あまりにひどすぎる光景に、まどかは感情的になり、気がつけば叫んでいた。

一方、大木の吹き飛ばされた少女は静かに瞳を開け、起きあがろうとする。それでも身体へのダメージが大きいようで、おそらく目もぼやけているのだろう。

意識はあっても、立ち上がれない。

「……っ」

少女とまどかの目が合う。大木の上で、少女は必死に何かを叫んでいるが、騒然たる空間のせいでまどかの耳に少女の叫びは入ってこない。

まどかはただ、少女のいる場所を見ていた。

だ、そんな時　隣の小さな白い生き物がまどかに話をかける。

「諦めたらそれまでだ」

その言葉に、まどかは小さく見上げる。

白い動物はまどかの行動が終わるのを確認した後、言葉が続ける。

「でも、君なら運命を変えられる」

「……っ」

小さく驚くまどか。その時、近くの赤く光る街灯が不気味な音を発し、まどかは恐怖と驚きから咄嗟に目を瞑り、両手で耳を塞いでしまった。

それでも白い動物は構わず　話を続ける。

「避けようのない滅びを、嘆きを、すべて君が覆せばいい。その為の力が君には備わっているんだから」

「……ホントなの………？ 私なんかでも………ホントに何かできるの？ こんな結末を変えられるの？」

まどかは小さな歩幅で少しずつ進みながら、半信半疑で白い動物に問う。

白い動物の答えは簡単だ。

「もちろんさ、だから」

一言告げると、くるりとまどかのほえへ振り返り、小さく頷きながら、

「僕と契約して魔法少女になってよ」

一瞬戸惑った。

本当に自分が力になれるのか。この白い動物の言うことが本当なのか。

それでも何かをしたい。目の前で少女が苦しんでいるのに。それ以前に、あの化け物が発生したせいで多くの人々が死んでいるというのに。今までだって、多くの友達を失ったのに。

みんな頑張っていた。あの化け物を倒す為に必死だった。でも自分分は？ 自分はあるの化け物を倒すために何かをしたのだろうか？ いいや、していない。していないからこそ、あの少女は化け物に一人で立ち向かっているのだ。だからあの少女は負けそうになっているのだ。

まどかは その事実が許せなかった。

「……………」

何かを決意し、真顔でまどかは白い動物のことを直視した。

S G B

「……………」

目が覚めた。

布団が気持ちいい。カーテンの隙間から太陽の光が入りこんでいる。ピンク色の動物の抱き枕の抱き心地は極上であった。

「……ふああ、夢オチ？」

起きあがり、抱き枕を抱きながら一言そう言った。

そう、夢オチ。

今までまどかは 夢を見ていたのである。

天変地異の中、一人で化け物と戦う少女をバツクに、魔法少女にならないか？ と勧誘を受ける不思議で意味不明な夢であった……。

S G B

まどかの朝が早いように、居候の上条当麻の朝も早かった。

「いてええエえええエえええッ！」

「う、かつぷあっ！ 朝からなんてモノを見せているのかなとうまは！」

「ちょ！ インデックスさんアレはですね！ 男の生理現象だから仕方ない事です……って、そもそも人の布団に勝手に潜り込むお前はどのなんですかああアああアッ！？」

「とにかくとうまは配慮が足りないんだよ！ とうまのエッチ！」

「朝からなんなんだよ！ ああもう、不幸だああああアッ！」

馬乗りされた上条は、インデックスに頭をガブガブと連続で噛まれていた。格闘ゲームで体力ゲージが三本、一気に青から赤に減ったような気分である。

「それで、とうまはどんな夢を見ていたの？」

「え？ ゆ、夢って……ハハッ！ 上条さんが変な意味の夢を見るわけがないでしょう！」

本当は寮の管理人とアハハウフな展開になる夢を見ていたのだが、噛み付き癖という嫌な悪癖を持つインデックスに、そんなトンデモな告白が出来るわけがなかった。

既に服が何着かダメージを受けているし、こんな若いのに頭皮のダメージについて真剣には考えたくない。とにかく、彼は噛まれな選択肢を選ぼうと必死である。

「ホント？ 天にまします我らの父に誓って言える？ 変な夢を見ていなかったって」

「誓います絶対見てないです！ アレはホントに生理現象で仕方ないモンなんですー！」

「やっぱりとうまはとうまなんだね……仕方ないから特別に許すんだよ」

「えっ？」

渋谷、インデックスは上条から降りると、静かに部屋の外へと向かっていった。

「お、おかしい……っ」

本気でそう思った。

あのインデックスが　あの程度の言い訳で納得するはずがない。にも拘らず、インデックスは割とあっさり退き、上条の部屋（仮）から退室。噛み付かれも怒鳴られもしなかったのだ。

上条にとっては幸運かもしれない。しかし、それはそれで気持ちが悪気がした。

（それにしても……）

部屋の中を見回し、自然が背景のカレンダーを見る。今日は8月29日、上条とインデックスの学園都市の外滞在2日目。滞在は明日までであり、8月31日……要するに、夏休み最後の日は学園都市に戻って、翌日から始まる学校の準備をするというわけだ。

「……さて、そろそろ起きるかあ」

滞在2日目。学校もないし、何かに巻き込まれる心配もない。

今日は何をして過ごそうか。そんな感じで上条の朝も始まったのである。

## 第4話 転校生

朝。

鹿目家の食卓は早速力オスなことになっていた。

「んん〜！ このピンク色のたらんとしたものおいしいかも！ と  
うまーこれなに？」

「何って……タラコに決まってるだろ？」

「はぐふおぐんぐつ！ 外はツヤツヤしていながら中身はツブツブ  
とした触感がたまらないかも！ ご飯がいつも以上に進んでお箸が  
止まらないんだよ！」

「一応言っとくけど、ここは俺の家じゃねえんだからな。少しは遠  
慮しろよ……っーか、我が家の家計も苦しいから出来ればうちでも  
自重してくれ」

朝っぱらから上条当麻は、食欲旺盛シスターの超自然的な姿を見  
て、はあ、と大きなため息をつきながら彼女に注意をしていた。一  
応ここは他人の家だし、なにより……インデックスが食べ過ぎて鹿  
目家が財政破綻しないだろうか。

上条はそのことがとつても心配であった。確かにこのまま放置し  
ておけば、間違いなく朝食はインデックスに食いつぶされるだろう。  
しかし、それでもまどかの父 知久は一切笑顔を崩さず、

「ああ、当麻くんもインデックスちゃんも好きだけ食べていいか  
らね」

「ホント!? わーいありがとっ! 今の私には貴方が輝いて見えるんだよ!」

専業主夫の優しい笑顔と優しい言葉。

インデックスは彼を神の用に崇めていたが、どうやら上条は違うようである。

「ちょ!?! いいんですか知久さん!? コイツ何もかも食い尽くしちゃいますよ!?!」

「むう、とうまは相変わらず意地悪すぎるかも」

「そっだよ当麻お兄ちゃん。インデックスさんに冷たくし過ぎだよ」

「彼女、成長期でしょ? 食べさせないと育つ所も育たないぞ」

折角忠告をしてあげたというのに、鹿目家の人達の反応は予想外。むしろ、インデックスに食事制限を加えようとする上条が悪い方向で話が進んでいた。

そんな悲し過ぎる現実を目の当たりに、上条は心の底からこう思う。

「なんで俺だけ悪者!? ああもう、やっぱり不幸だあ!」

結局、インデックスは炊飯器のご飯を全て食い尽くし、若干遠慮していた上条の分も少しだけ食べてしまうという、凄まじい大食いぶりを鹿目家の人間に見せていた。

ここで、鹿目家の人間もようやく気付いたのだ。

彼女、インデックスの食欲は 常識を遥かに超えるものだと  
いう事に。

それから、数十分後に詢子が仕事に出かけた後のこと。制服に着替え、詢子に勧められて新しいリボンで髪を結んでみたまどかも、今から学校に行くようである

「いってきまーす」

「いってらっしやーいー!」

食パンを銜えたまま外へ飛び出したまどかへ、家族が温かい声を投げかける。とつくの昔に朝食を食い終えた上条とインデックスも、まどかを見送る為に玄関まで来ていた。

「まだ8月なのに学校か……外つてのも以外と大変なんだな」

「あれ、当麻くんはまだ学校始まってないのかい？」

「はい、学校は9月からです」

知久の質問に、上条は軽い感じで答える。  
しかし、

「そうかあ、そういえば宿題は終わったのかい？」

「えっ？ しゅ、宿題……?」

終わってねーじゃん! と上条は心の底で叫んだ。まずい、このままでは小萌先生に何をされるかわかったものではない。上条はいまいち状況がわからず、きょとんとしているインデックスの事を放置してダッシュで階段を上り、自分の部屋に駆けこんで鞆の中を漁

つてみた。

「宿題！ 宿題！」

思い出してみれば、夏休みの宿題をやった記憶が一切ないのだ。

そもそも夏休みが始まった頃の記憶は失っているし、その後もステイルと共に三沢塾へ襲撃を仕掛けたり、その件で右腕を切断されたので例によってカエル顔の医師の世話になった。

その後も、御坂美琴や妹達<sup>シスターズ</sup>、実験の件で大忙し。一方通行との戦<sup>アクセラレータ</sup>闘で負傷し、つい先日まで入院をしていたのだ。

上条の夏休みは戦いと入院の繰り返し。

そんな状況で 宿題なんてものをやる暇はなかったのだ。

しかも鞆の中を漁っているうちに、上条はとある事に気付いたのだ。

「……………宿題ねえじゃんっ」

学園都市の第7学区にある、上条が暮らしている寮の部屋。そういえば宿題を鞆の中に入れた記憶もないし、おそらくあそこに宿題があるのだろう。

学園都市に戻るのは明日のこと。今戻っておそらく不良の餌食。

飯に不良に狙われなくても学園都市のお偉いさんに追放されてしまっただろう。

「……………不幸だ」

上条はまたまた頭を抱え、いつもの口癖を呟いてしまっただけであった。

8月29日の朝は雲1つない快晴であった。

独特な風景を持つ見滝原の、小川が流れるとある公園をまどかは駆けていた。この公園はまどかも登校する際によく通る場所で、さらに友達との待ち合わせ場所でもあった。

まどかを待つ2人の少女が、微笑みながら走っているまどかのほうを向く。彼女達も胸元の赤いリボンが特徴の、独特な制服に身を包んでいた。

「おはよー！」

「おはようございます」

「まどか遅い。お、かわいいリボン」

清純そうな大人しいお嬢様タイプの女の子が挨拶をした後に、青い髪のイマドキ中学生な感じの女の子が、からかう様にまどかのリボンを褒めた。

「そ、そうかな。派手すぎない？」

「とても素敵ですわ」

まどかは親友の褒め言葉に顔を赤らめたが、もう一人の親友の褒め言葉を聞き、どうやら少し安心してホッと、安堵のため息をつく。こうして、朝の公園で出会った2人の親友。今日もまた、3人で楽しそうに恋バナか何かをしながら登校していた。これが彼女鹿目まどかの日常の風景である。

「でね、ラブレターでなく直に告白できるよつでなきゃダメだって  
るんるん、と楽しげに足を踏みながら、まどかは今朝の話を2人  
にしていた。

その話を聞いた直後、まどかの後ろを歩いていた青髪の少女が急  
に駆けだし、楽しそうに憧れの表情を浮かべながらまどかの横に並  
んだ。

「相変わらずまどかのママはカッコいいなあ。美人だし、バリキヤ  
リだし」

「そんな風にキツパリ割り切れたらいいんだけど……はあ」

「羨ましい悩みだねえ」

「いいなあ、私も一通くらい貰ってみたいなあ、ラブレター」

2人の話を聞いていたまどかが、うつとりした表情でそんなこと  
を呟く。脳裏にはあの人の姿が浮かんでいたりするのだが、そんな  
事は他の2人が知る由もない。

「ほお、まどかも仁美みたいなモテモテな美少女に変身したいと。

そこでまずはリボンからイメチェンですかなあ」

「ち、違うよ！ これはママが」

「さては、ママからモテる秘訣を教わったあ〜けしからん！ そんな  
なハレンチな子はこうだあ！」

そう言ったあと、いきなり青髪の少女がまどかへ飛びかかった。それはもう、ただ襲うのではなく愛情タップリかつ、百合百合ラブとした感じで。

まどかは少女から逃げようとするが、結果は最初から決定したようなもの。例えるなら肉食動物に見つかった草食動物が、必死に逃げようとはするが、それは抵抗だったというものだ。

しかし、まどかは笑っていた。

青髪の少女はまどかを捕まえた瞬間、彼女の弱点に攪り攻撃くすりくをし掛けたのだ。

「や、ちょ、やめて……にやははへへっ！」

「可愛いヤツめえ、でも男子にモテようなんて許さんぞ。まどかはあたしの嫁になるのだあ！」

と、朝から凄いい勢いで馬鹿騒ぎをする2人に、お嬢様 志筑仁しすきひ美がゴホン、と静かに咳払いをすると、それに気付いた2人が動きをピタリと止めた。

あ、という声を漏らす。

よく見るとここは学校の目の前 同じ学校の生徒にガン見されていたのだ。それを考えると2人は急に恥ずかしくなり、少しだけ赤くなるのであった……。

S G B

ここ見滝原中学校はかなり特殊な校舎だ。街の中では歴史があるものの、最近になって近代化改修が行われ、教室の壁も全てガラス張りになっている。その特殊さは、おそらく学園都市でもお嬢様ば

かりが集まる、常盤台中学に勝るとも劣らないかもしれない。

白を基調として制服に身を包んだ生徒達が、白い教室の白い席に座り、ホワイトボードの前で眼鏡をかけた頼りなさそうな先生の話を聞いている。

早乙女和子。

さおとめかずこ

色々と悩み多き女性教師であり、まどか達の担任でもある。

「目玉焼きとは固焼きですか、それとも半熟ですか。はい、中沢君」

「ええっ！？ えっと……どっちでもいいんじゃないかと……」

「その通り！ どっちでもよろしい！ たかが卵の焼き加減なんかで、女の魅力が決まると思ったら大間違いです！ 女子の皆さんはくれぐれも半熟じゃなきゃ食べられないとか言う男と交際しないように！」

と、力強く和子は言いながら、持っていた指示棒を勢いに任せて折ってしまった。

「ダメだったかあ……」

と、まどかの親友である青髪の少女 美樹<sup>みき</sup>さやかは後ろを振り向いて呟く。それに合わせるようにまどかも頷き、愛想笑いを浮かべながら「ダメだったんだね」と返す。

同時に、頭の中であの人はどっち派なんだろうとも考えていた。そんな時 卵にケチをつける大人になると、男子に説教を終えた和子が、いきなり開き直ったように笑顔になり、ようやく本題を語ろうとした。

卵の焼き加減なんかよりもずっと重要な 本題に。

「はい、あとそれから、今日転校生を紹介します」

「そつちが後回しかよ……っ！」

さやかへの反応は常識的に考えて当然の反応であろう。彼女にとっても、やっぱり卵の焼き加減なんかより転校生のほうが重要だ。いや、普通の人なら転校生のほうが重要だと思うだろう。

「じゃ、暁美さんいらっしやい」

和子が転校生の名前を呼ぶと、教室に一人の少女が入ってきた。黒髪で、胸は残念な感じながら背はそこそこ高くて、整った顔つき……いわゆる美少女というヤツが入ってきたのだ。

生徒たちの反応は揃って単純。かわいいだの、美人だの言う当たり前の単語。

そんな中、ただ一人のみ　大衆とは違うふうに感じている人物がいた。

「うわあ、すげえ美人」

「　　ッ!？」

まどかにとっては、その転校生が別な意味で驚きの存在であった。夢。

そう、夢だ。たったいま教室に現れた転校生の美少女は、今朝みた夢の中で歯車の化け物と戦っていた少女にそっくり……いや、外見から雰囲気まで本人そのものであった。

「うそ……まさか……っ」

教室の中でたったり一人　まどかだけがある意味でショックを受けていた。

夢の中の少女が何故、転校生として現れたのであろうか？

「はい、それじゃあ自己紹介いつてみよう！」

「暁美ほむらです、よろしくお願いします」

それは物凄く簡潔かつ、表情が全く変わらない無感情な自己紹介であった。その横で和子が彼女の名前を書こうとしているが、何やら迷っている様子だ。

暁美ほむら……という所で迷っている。その先何を書けばいいのかわからないのだろうか。

そんな時、ほむらは鞆の中から携帯電話を取り出し、それを和子に見せる。

それでようやくほむらの字がわかったのか、和子の手が進み、ホワイトボードには【暁美ほむら】という名が描かれた。

和子が書き終えると、ほむらは生徒達に静かに礼をする。

あまりの威圧感に、生徒たちも困惑している。とりあえず歓迎しないと、ということ誰かが空気を呼んで拍手を始め、それに合わせる形で次々と拍手が沸き起こった。

「……………えっ!？」

そんな時、ほむらとまどかの視線が合った。どういうわけか、ほむらはまどかにガンを飛ばしているように見えた。まどかは思わず視線を逸らし、俯きながら迷っている。

それでも恐る恐る、彼女の姿を見ようとはしていた。

「え、えつと……暁美さん？」

和子まで困惑しており、どうすればいいのかよくわかっていない様子だ。それでもなんとかほむらに声をかけた所で予鈴が鳴った。どうやら、ホームルームの終了時間であるらしい。

この転校生……一体何者なのであろうか。

不思議かつ威圧的な転校生はその後、静かに指定された自分の席へと向かった。

S G B

学園都市第7学区。

8月29日の早朝、多くの学生たちは夏休みも未な為か、まだ終わっていない宿題を済ませる為に自宅に引きこもっている。その為今日の学園都市はいつもより人が少ない。とは言え、まだ夏休み終了まで今日を含めると3日ほど残っている為、遊んでいる学生は思いつきり遊んでいた。

そんな中、宿題でも遊びでもない 仕事に明け暮れる者もいる。

「こちら白井黒子<sup>しらゐくろこ</sup>。初春、例の侵入者は第7学区のどの辺りですの？」

第7学区の路地を走りながら、初春という人物と通話をしているのは、学園都市における警察的な組織の一つ、風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>の第177支部所属の白井黒子。小柄な茶髪ツインテールの女の子は噂の常盤台中学の制服を着用し、独特な腕章を右の袖に巻いている。

『その路地の突き当りを左へ、5メートル先を更に左です』

電話から甘ったるい声が聞こえてきた。初春飾利ついはるかざりもまた、白井黒子と同じ第177支部所属の風紀委員ジャッジメントなのである。

「了解ですの！」

言いながら、大きく膨らみながら路地を左折する。今回、彼女は学園都市都市に侵入してきた外部の人間を拘束する為に、態々愛するお姉様の事を置いてまで出勤してきたのだ。

黒子は携帯電話をチラリと確認する。

そこに映っているのは一人の少女。赤い髪のポニーテールを持つ、八重歯が特徴的な見た目はとってもキュートな女の子だが、やることとはえげつないらしい。なんでも、真正面から学園都市の「門」を突破して、多数の負傷者を出して強引に学園都市内に侵入してきたらしいのだ。

この時点で、対テロ用の警戒レベル「コードレッド」コードレッドが発令。学園都市内外の出入りが完全に封鎖され、風紀委員や警備員アンチスキルに、面々には公欠と共に侵入者の搜索・索敵の命令が下された。

かくして黒子は遊びたいのを我慢し、何時間も歩いていたのだ。

（あの人……ですの？ 間違いありませんわね、写真と全くの同一人物ですの）

向かった先で見かけた少女は、確かに赤髪ポニーテールの女の子。雰囲気こそまるで別物だが年代は黒子に近い雰囲気だ。赤いフリフリの衣装に、槍を持つ物騒な少女は、黒子の気配を察知したかのように槍を構え、こちらを厳しく睨みつけている。

そんな少女の威嚇に驚かず、黒子は決めポーズを取って、

「風紀委員ですの！ジャッジメント 貴女を不法侵入及び暴行傷害の現行犯で拘束

いたします!」

当然、槍で武装した物騒な少女の反応は薄い。ただ、薄くフツと笑いながら、黒子を馬鹿にして嘲笑うかのように、三下を見るような目で彼女を睨みつけた。

「ふん、折角魔女を倒してやったっていうのに、恩知らずな街だなあ学園都市って」

「魔女……?」

「素人に説明するのは面倒くさい。それにさあ、そうやって敵意を向けられるとこっちも色々とムカついちゃったりするんだよなあ」

口を歪ませ、槍を持つ物騒な少女は薄い笑みを浮かべる。  
その時、黒子の眉が僅かに動いた。

「あら、それはこちらと同じ事ですよ。どうやら、わたくし達は気が合いそうですわね」

「悪いけど狎れ合う気はねえ。アタシに得はなさそうだし、アンタもそんな気ないんだろ?」

「物分かりがよろしくて助かりましたわ。それでは、さっさとお縄にかかってくださいませ」

「つーか、超ウゼエ……いいよ、少しだけ相手してやるよ 能力者」

学園都市に侵入した赤髪の少女。

果たして、どういう経緯で学園都市に侵入したのだろうか？

学園都市にまで広まる魔女の脅威？

それとも……彼女の個人的な理由？

そして、能力者と呼ばれる白井黒子と 槍を持つ赤髪の少女の

戦いの行方は？

## 第4話 転校生（後書き）

・後書き！

なんとなく科学サイドを登場させたかったから書いてみましたけど……ぶっちゃけこの先あんまり考えていません（オイ！）  
とりあえず、これで科学サイドの方々も今回の話に登場、参加、活躍できればな～と思います！  
それでは次回、また会いましょう！

## 第5話 魔女狩り

暁美ほむら。

この日、見滝原中学校に転入してきた謎の少女である。転校生という存在は大抵は注目を浴びるものであり、ほむらも例外ではないようだ。ほむらの席の周りには多数の女子が集まり、「前の学校はどこなの？」だの、「髪すごく綺麗だね」と、彼女を褒める者もいた。

ところが、彼女達の質問をほむらは聞いていない……。

「……ごめんなさい」

と、言葉を区切ると、いかにも苦しそうな表情で頭を抑えながら、「ちょっと緊張しちゃったみたいで気分悪くて……保健室に行かせてもらえるかしら？」

「大丈夫？ 連れてってあげるよ！」

「いえ、係の人をお願いするわ」

ふらつきながら、ほむらは席から離れてある場所へと向かう。そこには、まどかとさやかか仁美の席に周りにいるが、ほむらはその集団に割って入るように近づくと、

「なにかな、と思った集団。」

やがて、目の前まで迫ってきたほむらはまどかと視線を合わせる。

「鹿目さん」

「……へっ？」

「あなた、保健委員よね。保健室、連れてってもらえる？」

どうして、彼女は自分が鹿目という名前である事を知っているのか。どうして、彼女は自分が保健委員である事を知っているのか。まどかはその事が不思議でたまらなかったが、保健委員としての役目を果たすためか、あるいは彼女の良心か、まどかは静かに首を縦に振る。

その奇怪な光景を、さやかと仁美は啞然としながら眺めていた。

その後、2人はガラスだらけの廊下を歩いていった。

本来保健委員であるまどかが保健室への行き方を教えるべきなのだろう、しかし何故かほむらがまどかを案内する感じになっている。まどかも内心、自分が案内されているみたいだと思っていた。

「あ、あの……暁美さん？」

「ほむらでいいわ、何？」

「あ、え、えっと……あのねっ！」

どうしよう、「何で知ってるの？」なんて……やっぱり怖くて訊けない……。

脳内でそんな事を考えながら、まどかはあたふたと慌てながら両手を振った。

それでも聞きたい。何故彼女が自分の事を知っているのか知りたい。

そんな想いが　自分自身を動かす。

「ほむらちゃんと私って、前に何処かで会った……かな？」

まどかの質問に、一瞬ほむらの目が見開かれたような気がした。  
何故だか空気が沈む。

「あ……なんちゃって……そんなわけないよね？」

余計な事を言ってしまったのかもしれない。どうにか誤魔化せな  
いものかと、まどかは必死に今の発言を無かった事にしようとする。  
それでも、ほむらの表情に 変化はない。  
それが余計にまどかを緊張させる。

「鹿目まどか」

「は、はいっ！」

「あなた、家族や友達のこと、大切だと思ってる？」

「え……」

突然の質問にまどかは困惑する。

そもそも、今の流れでどうしてそんな話になるのか、そこから意  
味不明だ。

「どうなの？」

「……もちろん、大切だと思ってるよ？ 家族も友達もみんな好き  
だもん！ あと当麻お……っ！？ な、なんでもないっ！」

「当麻……？」

一瞬、ほむらの表情が曇ったように見えた。

何故か彼女は家族や友達ではなく、当麻という名前に反応したのだ。

まるで、ありえない言葉を聞いてしまったかのように。

「……………そう、なら忠告しておくわ」

とりあえず、当麻という言葉はスルーすることにしたようだが、さっきのまどかの返事に続けるようにほむらは語りだす。強く、何かが籠められた視線をまどかに向ける。

「その気持ち<sup>ココロ</sup>が本当ならこれだけは守って。この先何が起ころうとも、自分を変えようだなんて決して思ってはダメ」

言いながら、ほむらはまどかに背を向ける。

保健室のドアに手を伸ばし、ドアを開けて中に入ろうとしながら、  
「……………でなければ、あなたの大切なものを　すべて失うことになるわ」

「……………ほむら、ちゃん……………?」

ハッキリ言うと、ほむらの言葉は理解不能であった。まどかも中学生だ、決してその言葉の意味がわからないわけではない。要は友達や家族を大切にしなさいと言う事であろう。

だが、自分を変えちゃダメとはどういう意味か。

そもそも、どうして彼女はあんな忠告をしてきたのだろうか？

その意味を考えているのか、まどかはしばらく保健室の前に佇んでいた。

見滝原という街は広い。最近になって都市開発が進められ、新興住宅地には人工的な景観の緑地や小川が整備され、郊外には風力発電施設や水門、工場などが置かれている。ここは後者の工業地帯の一角なのだが、どう見ても工場関係者とは思えない少年が一人、佇んでいる。

少年の身長は2メートルを超えており、加え煙草にバーコード。髪は長めで、ただしその色は赤という不思議な色である。神父のようにも見えるが、誰も彼を神父とは呼ばないだろう。

「さて、ここら辺から強い魔力を感じただけだね」

言いながら、少年は工業地帯を奥へ奥へと進む。

「ヤツらは結界を張り、通常の間人には目視出来ない状態で暗躍する……全く、最大主<sup>アークヒシヨツ</sup>教も面倒な注文をしてくるものだ」

少年はとある倉庫の前で立ち止まる。比較的綺麗で真新しいを見ると、近年の都市開発で建てられた新しい倉庫のようである。少年は倉庫の大きなドアに手のひらを当てて。

「ここだね……魔術師、いや、魔女だったかな？ 気配　つまり莫大な魔力を感じる。中々上手い潜伏方法だけど、僕達魔術師って生き物には殆ど無意味なものかな」

魔女。

それは魔法少女、あるいは魔術師たちが追っている異形の生命体だ。その正体の詳しい事はこの少年は理解していないが、どうやら彼は魔術師で、その魔女を追っているようである。魔女を追う魔術師の少年は倉庫の扉を開ける。眼前に広がるのは比較的物が少なく、広々とした空間。

しかし、ある一点に 明らかに違和感のある場所があった。

「見つけた……さて、と。仕事を始めるとしようか」

違和感のある一点、謎の円形のカラフルな所へ少年は飛び込んだ。瞬間、世界が一変。

工事現場のような空間に、無数の髭を生やした毛玉のような連中がたわむけている。

そんな中、少年は 。

「事前にルーンのカードは配置してある。結界内であればアレを自在に使えるね……ならば」

少年はニヤリと薄く笑う。

「一応名乗っておくよ。スタイル〓マグヌス……とりたい所だけど、ここはFortis931と名乗っておくよ。最も、魔女には理解できないかな？ 魔法名……まっ、僕らの間では殺し名だ」

独り言を言い終えた後、少年 ススタイル〓マグヌスは笑いながら右手を開いた。

決してそれに意味があるとは思えない動作。しかし、スタイルには余裕がある。

この奇怪な光景を見てもなお 彼は余裕でいる事が出来た。  
その理由とは、

「<sup>M T W O T</sup>世界を構築する五大元素の一つ、<sup>I H G O I H O F</sup>偉大なる始まりの炎よ」

ステイルはいきなり詠唱を始める。相手がいくら異形の生物であるとはいえ、これには耐えられないであろうと、彼の余裕はさらに増してゆく。

「それは生命を育む恵みの光にして、<sup>A I I I</sup>邪悪を罰する裁きの光なり。  
<sup>I I I</sup>それは穏やかな幸福を満たすと同時、<sup>A I I</sup>冷たき闇を滅する凍える不幸  
<sup>D I I N F I I M S</sup>なり、その名は炎、<sup>I I I M S</sup>その役は剣。<sup>I C R</sup>顕現せよ、<sup>M M B</sup>我が身を喰らいて力と  
<sup>P</sup>為せ！  
<sup>I I I</sup>魔女狩りの王！」

ステイルの胸元が大きく膨らんだ瞬間、轟！ という凄まじい音が炸裂する。その音と同時に彼から放たれた灼熱の炎。渦を巻く火炎がある一点に集まってゆく。炎が集まるその一点に重油のように黒くドロドロしたモノが芯になり、その芯は人の形を作り出していた。

それが消える事はない。むしろ、勢いを増すかのように延々と燃え続ける。

名は【<sup>I I I</sup>魔女狩りの王】、その意味は【必ず殺す】。

必勝の巨神は両手を広げ、まるで笑っているかのように激しい燃焼を続けた。

「行くぞ、<sup>I I I</sup>魔女狩りの王。その意味通り 魔女を殺しに」

煙草を吸いながら、ステイルはそう呟いた。

ステイル「マグヌス。」

彼もまた、今回の魔女退治に加担した【魔女狩り】、【宗教裁

判】などの、対魔術師の技術に特化したイギリス清教の組織  
セサリウス  
要悪の教会所属の魔術師である。 必<sup>ネ</sup>

SGB

学園都市は様々な学区に分かれ、それぞれ特徴を持っているのだが、ここ第7学区は学園都市の中心でもあり、故に人の数も多い。それだけに大規模な戦闘は避けたい所である。だが、第7学区と言えども路地裏の人口は非常に少なく、精々夜間に不良達がたむろする程度である。

ここなら、多少暴れる程度なら問題ない。

白井黒子も赤髪の少女も お互いにそんな事を考えていた。

(まっ、いくら学園都市の正門を突破したとは言え、所詮は外部の人間。能力者を前にしてどこまでやれるか 見物ですわね)

頭の中でそう思った瞬間、白井は軽い調子で駆け出して赤髪の少女へと迫る。赤髪の少女は槍を構えながらニヤリと笑った。いや、それ以上に吹きだしそうである。どうやら、白井の単純かつ無謀とも思える行動が面白いようだ。素人か、などと思ったのだろう。

その時、杏子の槍が複数に分裂した。

分裂というよりは、ヌンチャクのような形状となったと説明する方が正しいだろう。

彼女はそれを振りまわし、宙でうねる多節棍の槍を白井へ放つ。

(まさか、外部の人間の癖に能力者ですの!?)

赤髪の少女が持つ槍が変化したことに、白井は驚きを隠せなかった。

が、

白井が驚いていたのは、ほんの一瞬のみである。

「まあ」

と、一言を区切って、ほんの僅かにヒュン、という音が聞こえた瞬間　赤髪の少女の前から白井黒子の姿が完全に消えたのだ。

少女は目を見開く。無理もない、素早く動いて姿が見えないわけでもなく、何らかのトリックというわけでもない。白井は本当に空から消えたように見えたのだ。

赤髪の少女は戦闘開始早々、やや焦りを見せ始めている。

「チツ、どこだ!？」

「こっちですよ」

「ッ!？」

声を聞き、反射的に後ろへ振り返ると　そこには白井黒子の姿があった。

白井は余裕の笑みを浮かべながら、路地裏に放置されている廃車の屋根で、相手を見下すように目を細めて座っている。赤髪の少女は槍を元の槍の形状に戻し、刃先を白井へ向ける。これで白井も迂闊に攻撃は出来ないだろうと判断し、赤髪の少女は脳内で白井の事について考え始めた。

魔術……いや、そんなはずがないだろう。彼女はある程度ではあるが、学園都市に侵入する前にこの街の事について情報を手に入れ

ていた。

「どうやら、この街には能力者と呼ばれる超能力を扱う者がいるらしい。」

「詳細は未だに不明だ。」

「だが、その正体を掴む一つのキーワードとして、彼女が咄嗟に思い浮かんだものは、」

「それが噂の超能力か、生で見たのは初めてだわあ」

「ええ、わたくしの能力は【空間移動<sup>テレポルト</sup>】です。お次は攻撃しますが、覚悟はよろしくて？」

白井黒子はただの風紀委員ではない。瞬間移動<sup>テレポルト</sup>を扱う、大能力者<sup>レベル4</sup>の空間移動能力を扱う高位能力者なのだ。超能力者<sup>レベル5</sup>ほどではないにしろ、それでも軍隊で戦術的価値を得られる程の力を持っているのだ。

移動限界質量130・7キログラム、最大飛距離は81・5メートルと、決して万能な能力とは言えないものの、そこらの能力者を相手にする分なら、むしろチートなレベルである。

その性質上、余程の強者でない限り 勝利は難しい。

「上等だ、アタシもアンタを殺す気で行く！」

赤髪の少女は再び槍を変形させ、鎖で繋がれた多節棍の槍を大きく振り回す。白井へ向けてそれを振り下ろし、押し潰すように直撃する。轟！ という凄まじい音とともに、白井が座っていた廃車の破片が四方八方に飛び散る。破片に当たっただけでも重傷を負いそうであった。

ところが、廃車の残骸には血痕が一つも残されていない。

いくら車を木端微塵に破壊する一撃だとしても、肉体の一部は残

るハズだ。そうなると白井は直撃の寸前に空間移動を行い、多節棍の槍を回避したのだろう。

しかし、白井がその手を使ったのは二度目だ。

「おおオらあアッ！」

赤髪の少女が再び多節棍の槍を振り回す。今度は空中へ向けてそれを放った。

理由は単純、そこに 白井黒子の姿があったからだ。構えを見る限り、どうやら白井は後頭部へドロップキックをし掛け、地面へ無理やり押し倒そうとしていたようだ。赤髪の少女は特別白井を狙っては振り回さず、あくまでドロップキックを防ごうと、がむしゃらに多節棍の槍を振り回す。

「甘いすわわ！」

避けようのない状況であるにも関わらず、白井に多節棍の槍は当たらない。白井は空中で空間移動を行うことにより、多節棍の槍の直撃を回避したのである。

離れた位置に白井が現れた瞬間、白井は両手を交差させる。スカーフトが少しだけ捲れ上がった際に赤髪の少女が見た物は、大股に潜めてある大量の鉄矢があった。

素人なら見逃してしまうレベルだが、赤髪の少女は決してそれを見逃さない。

「チャラチャラ踊ってんじゃねえよスノロ！」

赤髪の少女が持つ多節棍の槍が一直線に伸び、白井の懐へと飛び込む。白井は大量の鉄矢を空間移動させようとしている最中で、ほんの僅かに隙が出来ていたのだ。

赤髪の少女はそれを見逃さず、その隙を突くように槍を放つ。ぐるり、と多節棍の槍が白井の周りを渦巻きながら、次第に白井へ迫っていく、

「あ、ぐあつ！」

まるで鎖のように、多節棍の槍が白井の体に巻き付いてくる。ぎゅう、と骨が碎けるほどの勢いで締め付けられ、白井はその苦しみに思わず表情を歪める。

鉄矢を放たれてからでは遅いが、空間移動にはタイムラグが存在する。

赤髪の少女は僅かな時間でそれに気づき、座標を指定する前に攻撃を実行。まさに0.1秒にも満たない無防備な瞬間を突き、白井を行動不能へと追い込んだのだ。

赤髪の少女は白井を巻いた多節棍の槍を振り回す。その近くには建物の壁。そこに直撃する寸前に多節棍の槍から白井を解放したが、慣性が働いている白井の体はそのまま突き進み、白井は背中を建物の壁に強打してしまった。

「……………あ、ぐつ！」

地面に落ち、仰向け状態だった白井の腹部に、赤髪の少女の足が下ろされた。

ドス！ という鈍い音が炸裂。メリメリという嫌な音が白井の耳に入ってくる。

「容赦はしねえよ。下手に動ける状態にしておくと、反撃を受けちゃうしね」

「ま、さか……………隙を突かれるとは、想定外でしたわね」

「想定外を常に想定しておくのがプロってヤツだよ。確か風紀委員ジャッジメントだったっけ？ 風紀委員はトーシロを戦闘員にしてのね？」

「随分……調子に乗っていますわね」

「調子に乗って負けたのはアンタでしょ？ アタシをシメンならもつと経験を積みよ。アンタ、実力はあるみたいだけど、経験不足のトーシロがアタシに勝てるわけないよねえ？」

この時、ようやく白井は気付いたのだ。

相手はプロであると。

これまで白井は風紀委員ジャッジメントの治安維持活動で、様々な無能力者レベル0の不良や能力者と渡り合ってきた。

ソイツらの中には目の前の赤髪の少女よりも、派手で強力な技を使う者もあり、正直能力的には目の前の少女よりも強かったであろう。それでも白井は勝つことが出来た。

だが、自分を踏んづける少女は違う。

能力的には白井のほうが上なのに、それでも白井は負けてしまったのだ。

「どうよ、今回は引き下がってくれない？ でなきゃアンタを殺すけど？」

言いながら、赤髪の少女は形状を元の肩に戻した槍を、白井の首筋へ突きつける。

差は1ミリ。

少しでも白井が動いたり、少女が槍を進めれば白井の首に刃が突き刺さる。

まさに、死の寸前だ。

「ふっ」

しかし、白井は口元を歪ませて静かに、薄く笑みを浮かべた。

「あなたのほうこそ、現実を甘くしておりませんか？」

「……な、に？」

白井は首だけを動かし、左を向いている。赤髪の少女は左方向を鋭く睨みつける。所々にゴミや廃品が散乱している狭い路地だが、大体10メートルほど離れたあたりだろう。

そこに。その先に、

どこかの制服を着た、肩まである茶色い髪の少女が立っていた。

見た所、白井と同じ学校の生徒のようだ。灰色のプリーツスカートに、半袖はんそでのブラウスにサマーセーターという格好は、白井の服装と全く同一のものである。

背丈や雰囲気からおそらく、赤髪の少女や黒子と同年代。茶色い髪が揺れる度に青白い火花が発生しているあたり、彼女も白井と同じ能力者のようである。

キン、という小さな金属音。

少女の親指が、一枚のコインを弾いた音である。ゆっくりとコインは頭上を舞い、ひらひらとゆっくり指先へ落下してゆく。

「アンタさあ、一つ文句だけ言ってもいいかしら？」

少女が言うと、丁度落下してきたコインが親指に乗った。

「私の知り合いに手え出してんじゃないわよ!」

瞬間。

音はなく、いきなりオレンジ色に光る閃光が、赤髪の少女の顔のすぐ横を突き抜けた。

その閃光は全体に行き渡るものではなく、どちらかと言えばレーザー光線。細いオレンジ色の光が一直線に伸びて、凄まじい轟音が炸裂する。あまりの速さに、雷がどこかに落下したかのように一瞬遅れて轟音が響く。さらにその直後、背後からも凄まじい轟音が聞こえてきた。

恐る恐る、赤髪の少女は後方を確認する。

アスファルトに一直線の深い傷がある。その傷を確認した直後、今度は先程の光線の余波みたいな烈風が巻き起こり、赤髪の少女は生温かい風の感触を感じていた。

「お姉様!」

「待たせたわね黒子。やっぱり来ておいてよかったわ」

「な、なんだ……アイツ?」

赤髪の少女は後退りをしながら、突然現れた少女のことを睨み付ける。ただし、その表情には一切の余裕がないように見える。先程とは違い 震えているような気もした。

「あら、ひょっとしてあなた、知らないで学園都市に侵入しましたの?」

「ど、どつという意味だっ」

「超電磁砲レールガン、御坂美琴みさかみことお姉様。常盤台中学が誇る最強無敵の電撃姫  
ですの」

そう、彼女こそが超能力者レベル5の第3位 超電磁砲レールガンこと御坂美琴みさかみことで  
ある。

赤髪の少女は絶句している。

超電磁砲レールガンのあまりの凄まじさに 言葉さえ思い浮かばなかった  
ようだ

「さて、観念したほうが身のためですわよ？」

赤髪の少女は後退りをしていた為か、白井はいつの間にか自由の  
身であった。白井は言いながら立ち上がり、鉄矢を構えてニヤリを  
笑った。

その横で電撃姫 御坂美琴も能力使用に備えて構えている。

「チッ、ウゼエ……超ウゼエ！」

だが、その時 槍を变形させた赤髪の少女が、多節棍の槍を勢  
いよく振り下ろした。

白井と美琴は構えるが、多節棍の槍が狙ったのは2人ではない  
地面である。

アスファルトを砕かれた事により、狭い路地に粉塵が立ち込め視  
界が遮られる。

「うっ！」

「な、なにを企んでいますの!？」

目を守るように、2人は腕を上げて目を覆い隠した。やがて粉塵

は風に流され、どこかへ消えて行ったのだが、次に2人が目を開けた時には。

「……いないわね」

「どうやら、わたくし達が視界を奪われている間に　逃走を図ったみたいですよ」

赤い髪の、不思議な槍を持つ謎の少女。結局、彼女は何の為に学園都市へ侵入し、何の為に白井と戦ったのであるうか。今の白井と美琴には、それが全く理解できなかった……。

彼女達はその後、警備員や応援の風紀委員ジャッジメントが到着するまで、しばらく学園都市の路地裏から青い空を眺め続けていた。

SGB

「チツ、風紀委員ジャッジメントの方はともかく、御坂ってのはヤバいわね」

戦線離脱に成功した赤髪の少女は、ビルの上から学園都市を眺めている。気持ちのいい風が吹きつけてくるなか、彼女は先程の御坂美琴という少女の事を思い出していた。

彼女の戦闘力は普通ではない。今まで戦った魔女より強いかもしれない。

彼女　佐倉杏子サイカアノコは素直にそう感じていた。

「まっ、学園都市のグリーンフィードは手に入ったし、もうここには

用なしさ」

御坂美琴も気になるが、今の彼女には目的が存在している。

「次は マミのヤツが居る場所に行くか」

その目的を果たすため、杏子は再び飛び立った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0613x/>

---

魔法少女まどか マギカ～幻想殺しと魔法少女

2011年10月26日08時07分発行